雅言解

一

い　一丁
は　十六丁
に　廿四丁
ほ　廿五丁
へ　廿七丁
と　廿八丁

911.107
Su871g

085789001-6

911.107-Su871g

雅言解
鈴木　重嶺／編

M31
DBD-2211

911.107Su871g

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

法を発たるまことの乃ちあれめらの志を始めんを

明治十二年四月　正二位藤原知

種玉編序

こゝやむを禁とゆ謂ひ。弱なる筆文を用ゐる。常為るを以て主もちゐること。うつくしきこゝなる人国中を経て。ふるまを以て是れを系あり。かゝるを文詞いうこゝ。学と（源氏梗衣の詞ならんとも。こゝろコトゝ入ることがおほし。中ごろ面ゆるまらぐ。学ぶ〳〵をづまはまほうとゆる。閑べうをこゝ。つくしく閑なるがおほうるを如。

鈴木重嵐の翁。ちゝ同じこの名ゝいうなり。嘉
世堂のしげまさ。峰のこゝ世乃高き事ぢ。
学世堂をつゞ当る。世の枝を試つゝ枝きはぶ。
文桃の如く積まるゝ。おく人おほ学ち舞
方。ゆくゝしぶ書（子学ちはゝ。かく枝ゝ
しる事ゝなゝしけゝ。ひと為世書ちゝ
学しまが学。野ち紫ち詞ゝ万ぢて。ゆな
しゝ紀ご世る学ぶ世のゝきい身ぶくゝ知ん。

世以学ゝ詩し。紀身ゆきど。他者の用ゐかゝつまく
身。世和ゝな自遣る詞ゐ世ゝおくべく。ゝ銘を
学学世学。重ゝなゐと世ゝ如く。きゝど言ゝ。
世紀ゝ。練ゝふゝ学ゝ。ゝ世ゝ。ゝ身ゝの
圃奥重ゝけゝこゝ人の言学ゝいきど。おほゝこ乃
言紀ゝ紀ゝ身ゐ。世ゝ学ゝ学ゝ。世以ゐ紀
学ゝ。

明治のゝゝ学ゝ。夢ゝ学ゝ世のゝく。世

の梅が香。臨川のすゞしさ。すゞしろ。園林すゞしろ。續
それらみなけぶるこゝろ。はまづしるに。

近藤芳樹

皇國にはふるくより歌といふものありてよまれたりけるを
あまつみかみのみ代よりはじまりてよゝにつたはれるを
圓珠庵阿闍梨萬葉集畧解のいでしより古學おこれ
るのちさるまじきこれにかゝる歌ども世にみちて三
考へにやよりて世に出たるものどもゝかきあつめて
ちらしたるがうつもれたるをあつめてくはしくかきあらはせ
まことのものゝ歌の道のあはれをしらしめむとて
歌をあつめたるふみのこゝろをしるさむとて

いふほとくも摘あつめ補ひつるは道風をたゞし
のこれる今の世に見なれたる言葉をもひろくいひつ
やまとうたの中にも世あまた集ともなきをあなかしこ
そのほかにもいにしへふみにおほくかゝりてのちの世に
万葉の道をまなびしも古今の道をまなびしもつねに
あるは詞ことばをしるしゝこと見えたるをまなびし
古言に雅俗のことばをひとつにまとめてあつめ
むかしよりこのみちにたゞしく物いふにしるしをなし

をも流布せしめし谷川士清ぬしの和訓栞石川
雅望ぬしのもいとめでたき雅言集覧なども皆古言の道
のあとをしるしとめおきたるものはおほかれど
はやくからこそおのれもかねてよりかうしてゆかんと
いふさまなりけるものをまなびてとりて
いにしへよりのことはともにあまねくこれ和
訓栞に記されたるもあまたあれど雅言集覧には
事をもひろく撰みてこれはよろしからぬものなりと

序

丘

まことにこれを後篇なりと思へるまことなり

明治十二年三月

坂本重顕識

雅言解凡例

一此書中世万詞をもとしるせる中に萬葉集の歌を加へられど今の言葉よりもちいれて似つかはしからぬ事とおもふ人ハ

しらぬ古言をバ続萬葉なるべくなるべくと思へばなり

一解ハ初学の為やさきをもとしるればなり京の俗言を

もて律しもちいるぬ事なるハ俗言をもて云へるなり

づうずうずあること又論の説あるも有べけれど略す

てらしあはせ自ら会得せるなり

一冠辞も今の歌に用ひて耳立たぬハ古言なりとも加へて
よみぢの末に出せりこハ初学の輩久堅足引などつねに耳の
かぎりとハおもひ誤りて其もとの意をしらざれバ故らよく出して
其ことをものしてハ冠辞考又続貂よりもぬきいでゝ猶加へ
たるもあり但初句のあまきもまされ吹風の目に見ぬ人も
深山のちがれてなどの類ハ「のごとく」てふ意にて冠辞に
あらざれど序歌となづけたるも続貂に加へ多く載せ
それらハとらず

一言葉のついでハ五十音をもて次づべけれどさてハ探りもとむ
るに便りよからねバ猶しく總角のほどより訓る伊呂波
假字の順次をもちゐつ

一良利留禮呂ハ初言に居うべきにあらぬ故に省けりらに（蘭）
るく（琉球）るり（瑠璃）などの類字音なれバとくあゐ（井）もことばならし
ゐざり（膝行）ゐやか（嚴）ゐやび（禮）など云てしバなるねバもらさず恵恩
ことばも多かれバはぶかぬ

一萬葉集以下撰集其外の歌集どもハ古今集ハ古。新古今

集ハ新古長哥ハ長旋頭ハ旋と云て家集ハ世間に
所恒など名をつけ伊勢大和狭衣の類一字又二字を志
て源氏物語ハ巻ごとの名相壺帚木などいふもの
一今てゝ世に栽合もをかしけれどもろ〳〵の物語にて昭君ハ人
人ふる〳〵ものがたりなどおもひてやゝぬ人をつくりてし
多多あるべし

明治十二年三月

翠園主人誌

雅言解巻之一

東京　鈴木重嶺纂

伊の部

い

○寐ルヲ云

○イトバカリモイヒ、イモネズ、イヲネヌ、イノネラレヌナドモ云ヘリ。

いろどる

○彩色スルヲ云

いろく

○俗ニ同ジサマ〴〵ナ

いく

後竹ちゝ〳〵ゆどゝねハきゝ〳〵ぐひすのちゝあきけば鶯いせゝまべ

河内愛なくて又もあひぐき男ちゝば福〳〵まぬいをちかげこぎ〳〵ほし

後ちゝ〳〵ぎて一ゝなきていぬる夜ハいつでか人のいをやさくぬる

いくもやもあきぬる

後秋をぎををぐるるハきぬるもこゝろかれぐ〳〵ものをもゝ〳〵ぢあへちゝよ

小萩ちゝ〳〵ゆるりふさうハちゝ〳〵ゆゝいろくゝまゝて見んやゝうゝれ

り。

いとゝからしい
○宜長云。砥礪磐ナリト。堅磐ヲカタシビト云例ナリ。

いとがきふち
○岩ノツバダナタル淵ナリ。「岩垣シミヅナド」モヨメリ。

いへづと
○ミヤゲ

金 神奈月ちぐれのあめのふるまに いろ〳〵ちるすゝうやまの
万 せゝの瀬川いとゞかしこきかな あハかゝんよろづ代はぐくむ
附動 つれなきのたゝ一ハありと吉野川 いはとがしハをあゝふきつゞ
読 こゞしきも人ちるやかゞりのいとゞ恋の庵れ玉岸々
続ハ拾 ふせそうき名ちぐさかげろふの岩ぐき淵よ分ハちゞれ
附動 たそゝめや人ちるむさゝびをとりていへづとよきん
ちりぐよやゝのるものをおりぞゆくこのり れふを家づとにせ

いと
○ハナハダ
○イカウ
○マコトニ

いとゞ
○イチバイ
○ベツシテ
○イヨ〳〵

いとゞしく
○イトヽ〻ナリ。シクハ。万葉ニ及ノ字ヲアテメリ。後世イトヾナホト云ヘレド。古ニナシ。イヤシキ言葉ナリ。

いとふ
○キラフ

た いとせめて色〳〵さゝはぬぬぎ玉のよるの衣をこゝ〳〵てきるふ
ハ 岩のこゝよるゝびをきるんハいとゞ色〳〵ちけの衣をきるかさん
拾 ゝもあれ秋ゝも人のもゝれいとゞたゝこそはゆけるをとゝ
金 さゝぬぎよるまぐひてゝ寄をいとゞふがけるゝ秋のよれ月
ハ いとゞ〳〵こゝゆ〳〵かゝの寄〳〵きよこゝやゝとゝる陸れ
ハ拾 さゝゝるゝゝ月をいとゞ〳〵つきおどろゝ陸のおゝ武
金 いとゞ〳〵おもゝげまゝろゝひゝれ月ゝよゝゝる寄〳〵ぎりを
金 萩さゝゝぬむのあゝ〻ゝをきゝされバいとゞ〳〵風ぞ〻ふゝふき

いとほし
いとほしむ
○イトシ
○カハユリウ
○イトシクオモフ

いとおく
○イトマナク
○イソガシク
○ヒマガナク

いときけあき
○幼年ヲ云

牧士
さびしはいかおもひまつる山里のいとふ人目のちどまるうん

金
あつまうでくあるひもようしてびえ行のいとほしとぶらいてきうぞや

岑家
我のこぞめのこころをばいとかむあられず人のあきまつけて

古
ひかれてもうしとも知をおもふきたりぐあるぐのいとなうん

拾遺
一とせをまつてこびしこぬまをあんばいとかくりかいを花をこうこれ

相表
いときあきあきあわえのひくもきををきこころいむけびあつや

夫
いとけうきわづかをあつこの里にあきてこひの月にあるうげこう

いとたけ
○管絃ヲ云

いとろ
○斬ノイト水ハ雨望ニ。
水ノキノ玉水トモ云
ヘリ。

いちじるく
○ハツキリ
○シカト
○灼然ノ字ニアタル。明
カナル意。

いちとやき
○スルドシ
○ハゲシイ
○一早シノ意ニヨメル。ハワロシ。伊勢物語ニ。イチハヤキミヤビヲナンシナル。是等ハスバヤイハシコイナドノ意ニ當レリ。

いとけあき
○幼年ヲ云

夫
えこうるあこうあの座の神あそびいと件のあり月にきくり

円
神うぜやこうもそそ川のさこうこうをあいさこうこうをいとけ

拾
さこうぶれのたきもぬぬいあの座の新れいとろ絵をぜりくアこ

万
道のべれいちのこのいちじろく人これきりぬわぶまひづりハ

金
三笠山神のこうのいちぞろくこうあうこうこうきこそ蛙き

数木
えこち川こうこうこ梓のこうもいくまでおこいこいくぐのいこやのこや

山家
いさぎこうきこをこうこうぐをいこけあきあきあこさこうこをぐいし

いかゞ
○ドウデアラウ
○ドウマア
○ナント

いかゞい
○前ニ同ジ。ハノソハリタル故一段オモクナルナリ。かざし抄ニ。ドウマアコレハト訳セリ。

いうま
○ドウ
○ドヽヤウニ
○ドウヂヤ

古 秋風ゝやゆのこのまたちうくんば人のこゝろもいうでとそぶすゝ
河 かゝげうあつひのまれゝなる人をいうでつゝと思はぎうぐき
ほ あきくんぞと人をいうひて有ねきゝんのこゝさぐいうでこゝへん
世 世中ハいうゞハきやゝきちげ山のまゝたちの板のちゝだゝれ
物 ゝのおりてゝいそぬぎろハちのづゝいうづハさぐき袖のちづくを
古 ゝゝ川の山べゝをれんばちゝゝやのいうゝをゝゝちゝ所ゝけるき
内 世中ハいうよくゝおりつんさらゝんくこゝゝみらるれハ
古 都人いうふゝはバ山たゝくゝちれぬ雲井よりづゝこゝへと

いうふして
○ドウシテ
○ドウゾシテ
○カハノソフトキハ。ドウシテマアト譯ス。

古 ちゝゝちのゝるゝひゝをいうゝて山のこの体をゝゝゝもんん
於 いうゝて志げゝゝもれんいのちゝゝあゝばゝゝ春のあゝも紅さん
ほ ちゝゝて乃ゝゝまゝの山里よいうゝゝてゝいちのきゝゝ春

いうふぞ
○ドウヂヤゾ

後 まゝさめゝいうゝゝぞ梅やうゝゝんやゝゝんゝぞハちゝかゝゝぞ
後 ゝゝぶやゝゝひやゝゝぶゝ寄ゝきをいうゝゝぞ男ゝ袖ハくちぬや

いうふせん
○ドウセウ
○ドウシタラヨカラウ

万 同ゝいんゝてゝゝハゝゝれぬ月のゝちのかゝゝのゝでき妹をいうゝきん
世宴 ちゝのちゝて宴ゝと山ちのちゝゝゝづゝハゝゝゝいうゝゝせん

いうふやいかゞ
○ドノヤウニマア

於 世中をかゝいひゝのちゝぐゝいうゝやいうふちゝんとゝむ

いうで
○イカニシテノ譯ト大方オナジ

たくさうあるばいうでこやうに苦やうんくふちく川の実はうえぬと
はれいづちとも考へぬやうれの孫ちれどいうであこぶの先よたつむ
徒れいづくも出ろうよあてきものづをいうでまみぐのまづをりぬん

いうでくく
○ドウゾシテ〳〵

れいうでくくこうるこうをちぐさめてほの世までのすのをおるかじ

いうでう
○ドウシテカ
○ドウシテマア

れみうの池のうくはこうあるよちぐれていうでう月のそこよいうこん
あ栄ちうつうるのこひゆくまもちぬやうこいうでうこなのきえんとせうせし

いうられば
○ドウシターデ

後いうれ生ばおるでちぐわくよみぢ生るさこその杜のこすこうこうん

いうられや
○ドウイフワケデヤッ

六春くれば流のちくこふいうれきやもちぐどもあやあるこうゆ春
野れ山うげよすすぬんいうこまわやをこまれてこうる月もある世ふ

いうふる
○ドノヤウナル

れあくきいあもこいでくくあこいうれうる時うむひよちむうん
迫男ひぐちう野れめばあやめるいうれわるこうふはかけはし

いうぐかり
○ドノヤウニ
○ドラホド

れいうちうのあき世ちうせばいうぐこうう人のこうのも蛙かるや

いうさ歯
○ドノヤウニ
○ドウシテマア

野れいうぐこよまてこうちんうれみはいうぐこうう生のあしぐ
食ちのすきこうこうちすぐさかこのいうこうゆよせば人をじき紙ん
茶ちれちんと思ふ物のかこうきいいうさまるのていうさまるきん

210481

いよく
○俗ニ同ジ
○イヤマシニ

いよだつ
○身ノ毛ノタツヲ云、今俗ニ身ノ毛ヨダツト云、是ヘ。

いよす
いよすぐれ
○伊豫ヨリ出ル簾ナリ。マドホニアメル簾ヲ云、

いさつき
○煩勞ノ義

あもうくちきも世〜きき世中をいつさちよりはいつもひさだめん
老ぬをばさ〜ぬるとれのたちとりていよ〜んやく行き考れ
苔〜きたの小川をいとらうわざいとく〜きとちりたるぶ
今のちるのちてぶふむせぶタぐれハ年もいとぐちぬさぐろ言ふ
あしのうきをよりたるいとぐんいよ〜かれをわびさしるぶ
年をくて世をたてけるいとまぐれかげさげられて身どがさてき
さく物名 ゆはりひてくらのあぢきれさふいさつきのいとまぐ

いたる
○到ナリ。ユキワタル意

いさどく
○戴ナリ。俗ニ同ジ。頭上ニサヽグル意。

いあたま
○頭上ナリ

いさく
○ハナハダ
○キッウ

まのあたりいつくしぬ里はあ〜じさるちかぢるなのこゆ〜あ
まくれば花のこぶをさをりれていつ〜ぬさのたをうつ〜ふ
あわぢ父〜きどすけちろと代さでもいとぐきちるすぐ〜あちん神
けくらのて雪をいとぐ〜おきれるみの神ちとちりやちろん
年ちれどわがいとぐ〜ぶよあ〜雪をそをのこ〜とあるひろ〜ぶ
きり〜れいとくれちきて行のこの雪きあるひいわれできぶ
かぐれバ年〜ぬすのらと〜ちふひてちく〜いとく去でちる

いさづら
○ムザ〳〵ト
○ムダニ

いたづら
○死スルヿヲ云。伊勢物語ニ「ゾコニイタヅラニナリニケリ」トアリ。則死ヌヿ。

いさづらふし
○恋ノ詞ニテ。実事ナクムナシク寐ルヲ云。

いさづらい枕
○前ニ同ジ。稲ニカケテ

万 わがやどの花ゝもちまあはいさづふちろうちんゝて人あり
古 かゝばうをしとあすの秋をいさづふねてたちん人さぞき
古 夜むしの身をいさづふちんゝるみとろひようてゆろう
ありゝもいつぐき人いあるゝべ身のいさづふちぬべきか
後拾 いさづゝま身ハちうぬゝもつかぬ人ゆゝとぞふ見をきしば
拾 いうちりけれ仆のひとゝぞふいさづふをゝるといふらん
拾 こひゝてゝもちゝるかひなよ仆のいさづふよあけぬゝ長
注 あきの田けうゝあふゝまてゝちいさづふねをなのよつ月はし

云。いたづら稲ハ「ヒツヂ」ヲ云ナラン。
○穂和名抄ニ貧稲ハ俗云ヒヒ豆知。自生稲也。

いさづらね
○前ニ同ジ。獨寐スルナリ。

いたま
○屋ノフキ板ノヒマアルヲ云

いたぶき
○板ニテフキシ屋根ナリ

六 わがつゝるいさづゝいねの数ちばなかぼうちきゝちまかけ戸
重恋 ゝ逢ゝのあきつゝかゝるよれゝハいさづねもあるよけゝれ
中務 人ゝちてあきつゝあうんよれゝハいさづねもちぬ屋まぶ
拾 板いつゝもてゝるいさまのたゝぎばいるよさんとろやねをあけむ
手本 山のそよいゝそで月をちぐあんゝ屋のいさまよをるゝあつやと
新六 ちぐゝろちゝる福やのいさづきあゝて家をきくいゝゝろがらも
夫 ちゝやすぎいさづきのひ月をあゝみたゝぬ月ちゝとぐぜも

いさふ衣
○カリソメニ造リタル田舟ナリ

いれひも
○裳束ノ時左右ヨリ結ビアハスト云説アレド、雌紐（メヒモ）ヘ雄紐（ヲヒモ）ヲ入ルヽト云説ヨロシ。

いそ菜
○真淵云、磯ニオフルワカメ（和布）ヲ云ナルベシ。

いつ
○俗ニ同ジ

夫 あまをぶね漕ぎわたれいたつるかおろかこのきかさねう那
日 くつまと田のいさふみてはいをつくるさきへかふ
左 ちそてこあれバくるしれ衣のあれどんよいさむすびてみて
六 いれひものさして来つれとかこころもうくいひてもかくしつるル
九 こころうだのいそちちてしいちつむをきしぬきれ沖をれ波
ほ 苔のごとあぢあれゆく世の中よいつとりむとうおとづれもをぬ
続古 こちつくふあてこ川のうれ木のいろあしつれてこき名とうん

いつしう
○イツノマニカ、

いつしう
○イツカ早ウト云意ニ天、願ヲフクメリ、前ニ云ヘルイツノマニカノ意ニヨメルハ後ナリ、古クハ未然ニ云フコトバニ、

いつより
○イツ頃ヨリノ意

いつとふく
○イツト限リモナク

ね 秋のきりぎりすいつしうあるとも秋のきりぎ落
新古 秋きぬとあるひをあつぬ萩の葉をいつしうかをるうえの方とうれ
ほ おもひもいさわれもつるべあるぬをいつしうさてもやもさうふ森
新古 さをを扇の入形をすきぬ初をもいつしういるとづたぎくよ落ん
古 くつかうハ今こん年のきのふさぞいつしうとみぎちわるぎき
後拾 いそぎてくるれをきつ山をとふいつよりすあるあ紀の月ぞ
新続古 きくもこしくんのあねのわすれをいつどうう世よ名をのこ久ん
永久 いつとなく年ぞくね山の桂しじよ人のこころをふれ世をるがれ

○イツト云定リモナク

いつぞや
○俗ニオナジ。文ニハ多ケレド。歌ニハ少シ。

いつのまに
○俗ニ同ジ

いつも
○俗ニ同ジ

いづく
○何所ヲ訓ム
○ドコ
○ドチラ

いづこ
○イヅクニ同ジ
○宣長云。奈良ノ朝マデハイヅクトイヒテイヅコト云ヘルヿナシ。

いづれ
○ドナラ
○何孰曉。又孰与ヲモ訓メリ。

いづら
○ドコニ
○ドコヂヤゾ

いねがて
○寐難キナリ

いな
○イヤ否

〃

いなく
○イヤヂヤゾ〳〵

いなそもうとも
いなもうも
○イナ否ウ雖ナリ
○イヤトモオウトモ
○後撰ニ。イナセトモイヒハナタレズ」ト云歌アリ。イナウニ同ジ。

いなゝく
○イバユニ同ジ。万葉ニ。

古 宮上川のみれハくぐるいるのハあるハもぞ氏月ばかり
於 をゝれぐ我よやどをいれていたてとこそさぎめや
はれ ゆるのふくうゑ因ゆたてるいれぐきのいあと人のいとびあ苗
六 芦のやみとやの馬のやのしのびまいなくとろハ人のろもち
月 芦ばやくもるゝ山いもゝ舟のいまぐ寒いさゝまあじ
信明 ゆるのちよいれるもいひてよ人のもちることふせゝれて
万 いるもちるもるきにゆるすぐきかもちろゆも我もようあん
ホ わぐくるろのまゝろんあゝぶ夏いこゝぶもおのきいるけ

馬声ノニ字ヲイトヨマセタリ。

いゐ伸
○嘶 和名以波也 俗云以奈々久 馬聲ナリトアリテウマノナクヲ云。後世イバフトヨムハ誤ナリ。

いゐんいねに。いゐ。
○去ン。去キ。去ク。去ケ。オナジ。○イヌルトモハタラクナリ。

いなぐき
○稲莖ゝ。ニハ稲ヲ刈リタルナーノキカブヲ云。

後於 あハづ野のすぐろのちきつのとそバみそもちづむ弱ぞいぞゆる
ほ ゝぐわるもあづゝ弱もまゝれバいぞゆばろふもちゝよらゝれ
ち そゝえるゝるこうやのあゝぐゝなきうてやはのゝぶひの弱いぞ市ん
古 わびのわれぞ者をゝ知ゝのの根を絶てさゝゝ者みあゝバ者ゝとぞ立
千 矣おきゝさせるゝ安のを命ゝてなのハれゝゝのいのきもいぬ知ろ
秋動 さゝ ろよ安のけゝるゝおきていぬバ覚ざゝるきゝややゝん
後於 ゆるのふく苅田ゝるいるぐきけいるてハゝれとのいゝびあゝん

いのち
○命ヲヨム。此後撰千載ノイノチハ、命脉ト云フニテ、ソレヲ頼ミニト云程ノ意。

いの松られぬ
○イヲネヌニ同シ。イネラレヌナリ。

いくら
○ナニホド
○ドヲホド

いくそ
○イクラト云ニ同シ

後 つれもなきこゑのそあぢよおもをいのちとたのむせこのちろ分さ
子 契りおきしませもぐさを命とはたれとしの秋いぬえり
前古 年をへけるこゑのべしひきやいのちをかけさやの中山
方 わかくしだいくれをきていのねまぬよきけばくるも
前 ぬぐるものやこのつはさぐるる夏さいくもはさしぢの名
前 青柳のくぶるとのをとろかへしいくづうのまをべぬん
前 かぎりをきおひの宮ちぬれぢいくそのくろふりをとあるむ
日 あさまーやこの下蔭の岩しるいくそのへのうげを見てん

いくそやく
いくやく
○前ニ同

いくの
○ドラホドノ日數ナリ。幾代幾年ノ類ナゾラヘテ知ルベシ。數多キニアラズ。

いくかど
○ドラホド
○此歌ハ虫ヲカネタリ

いくき
○馬ノ丈ヲ云。今モ馬ニ

古 花ごろあのびちくーー風をんばいくそばくーーかぐらしとうはおふ
日 いくだくの田をつくれぐろかくーーぎさしでの田をとあそれさぶよ常
万 わがせあとやまよ見まをばいくばくしふる雪のくんーーうまし
古 まるかのくーーびひの田を出てそよいろあるてかをつてん
日 ぬれつーーそきひてそろくる年のくーーちよまいくーーちーーとろを
玉 まのをむあぐむるまのんくていくほどーーあき世をきそとそやや
詞 なのーーくさの松ちのの月のちくーーをばいくばの海とりでちてまし

ハイクキト云キハすナリ。日本紀ニすヲキトコメリ。

いぐし
○イミグシ（齋串）ノ畧ナリ

万 いぐしたてこそすれ神ぬしのゆずのむらげそわれだとり毛

拾 これ自のきこそ紀かりよいぐしたてこそこゝをそ神こけつし

いや
○イヨ〳〵

古 若べどもこの舟をさしてゆくのいや遠ざかる方かあ毛

後 人ぬれどなほ年のかりねだにつゆのいやをるくこもるゆふ

いま
○モウ一度。今イチドナド云モウノ意。

古 まそかがみのこぶりの神ぶりいでゝ見よいりいくあてやられ橋ん

拾 小ぐ〳〵山こものもゝぢばんあ〳〵ばいはひこゝぶの三毛きやさあん

後 ちゝぬやこよいり一こゝおゝ見てしだれ毛はさんでこゝ見ても社ちん

いま
○タヾイマ

古 あゝこの山りさ城くわをちゝまんこぞこんはこゝふいりであくれる

後 いもゝ家のはひりくるこゝるまゝ拾くいりやあくんこゝひすのあり

いま
○オツ〳〵ゲ
○ヤガテ

古 えゝゞちゝぬいりこゝろみよ余ほゝばわれやこゝすこゝ人やこはぬと

拾 おゝこゝうれいふばの山の峯よおつるまゝこゝたゝゞいりこゝうん

後 このねぬる夕まの風こゝいりやたゝまん夜かゝゞよ

いま
○ナホニ似タルイマナリ

拾 まそこゝろこゝろふこゝろハ時〳〵こゝいま一こゝせの君ゞ恋ひくる

拾古 家ばゝりつゝきをちのゞ人やあゝといま世よあゝば思ひなつきよ

いま
○マタニ似タルイマナリ

古 くゝりはいまこゝん年のきのふこゝでいつゝこゝのゝきちやるべき

いましいと
○シハ助辭イマハナリ。ハヲ渭ルハワロシ。

いまさらに
○イマトナリテハ

いけるかぎり
○イキテヰルウチ

いぶせし
○ウツタウシ
○コヽロモトナイ
○たらちねノ方ハコヽ
一テヽテク、タ芽ノ方ハウツタウシサト訳スベシ。

万 あゝ玉の年の経ゆけバ今しはゆゞよゝ世すぎ去れ
古 いとゞしきものをさゞげの花ゆゑ我をこのむら
古 今さらに山へかゑられちゝきぶんあるのうぐいハヤゞやどよあけ
六 いつくとも思ふものかゝ今さらにたゞまことをゝ我ハこのもん
後拾 思ひのの分の行ゝ字ゐる差をいとゝ限りのうゝとゝゞれ
万拾 あゝちものゝ花やのうゝつゝのゝ花ゆゞゝいづせくゝなるゝ君よあいだて
未摘 夕雲のたゝゝゝきもゝゞゞゝぬよいづせさそゝるゝひのあめゞ

いふかひなし
○トリドコロモナイ。イキテヰルカヒモナイノ意。

いこふ
○慈ノ字ヲヨム。ヤスウフナリ。

いで
○コレ
○ナンヂヤ
○万葉ニ乞欲ナドモヨミテ。歌ニヨリテ。乞フ意モコモレリ。

いでや
○イヤモウ
○語ヲオコヌ言葉ニモ云フ。上下ノ打合セニヨリテ訳シ方異レリ。

後拾 いせ海やちゝひの加ゝるあさゝうてもいつゝひたるきハやゞ分ゝ色
千 ちゝのゝ色よ四分のゝゝゝたづぬきどゝハ我身のいつゝひ形ゝ
万長 川の氷こゞをさゆゝ板をいゝふゝゝゝかゝひて上下畧
古 いでやわれを人ゝゞゝゝ大ゝ船のゆゝゝ命ゝゝのゝひゞゝ
千 ゝのゝよいでゝゝかけ命の波さきゝハ定をゝゝゝ
古 我をのゝあゝいとゝゞゝきをいでやゝゝろハ大ぬさゝて
後古 さてゝも又ゝちゝやゝゝみん梓弓いでやと人をゝゝゝのかゝ

いでまし
○行幸ノ云

いでゆ
○温泉ノ丁ナリ

いさ
○不知ヲイサトヨム。イサハシラズノ意ナリ。ハスミテヨムベシ。

いざ
○ドリヤトヨビカクル

万 すくなへ山の松むしまきつこゝやが大きみのいでまし所
同 すえろぎのいでゆまし此月よりきまるがたれたびに月ぞへまする
後拾 つきもきべ古ひよりみぐをあぐれうやあくくのいで湯ちるん
千 あるづくしきを古事をこわの神ちゝバちるゝ有るまいでゆちるべし
古 人いさこゝろもちるべかるゝいとぞむこゝけ事よりひるる
同 いめくこのとゝ山ちるいさや川いさとこゝとやぶるゝ十ち
千 人いさたゝぬ布ぶとよとめつるやづんつぶもれをゝつあ
古 打こゝばゝとげすもあるゝ樣ちるいぶやどうてちるゝでハんん

コトバ

いさゝ免
○チットノマ
○カリソメ

いさゝ
いさら
○イサヽカ
○サくヤカ

いざゝ
○目ザトキナリ。イザトキ。イザトシトモハタラク。

いさご
○スナゴ。マサゴニ同ジ。

後 ふる里の野べ人ゝゆゝこゝるぶをいざ法るにやち指て兼
万 ちち本拍つくゝちそびといくゝぞよかゝれのくめとつくゝあやも
古 いさゝめまけふゝまぞはへぬる人ぞをぞバ人ちゝとくゝ
新古 言ちちきいさゝむ行風ちけハなきるおどゝく文のよの言
拾 まるゝとむすびあるゝやどのいさゝを川ようゝ秋ゝ見
大 校ますぐゝねぐゝさだめぬあちすれりさいぶとれるちぎれ代
忠峯 汐ごすのいそのいさゝをつみまして古代の数ぞあるゝべゝなる

いさよふ
○猶豫ノ意ナリ。ヤスラフニ同ジ。

いざふふ
○サソフナリ

いさ里
○スナドリヲ云アサリモ同ジ。

いきのを
○息ノ緒ニテ。命ヲ云ナリ。

万 武士のやそうぢ川のたつろ舟いさよふ波のゆくへしらずも
古 君やさんわれやゆくえのいさよひに桔の板戸もさしぬ夕べ
古 いづくよりゆきてはきぬるものなれかくろ[illegible]いづくれさて
万 荒くの磯のうらよりこぎいでてあまとやさんん孫ゆわれを
後拾 かくちんとあるものいさりやわの魚を探べのあるものをもとぶ
万 いきのをよあるつるわれを山ちさの花ろ君ぐろつろひめくん
永久 かきまぐれくづよちれるいきのをくむすびとむる世社つくれ

いきうし
○行クノガツライ。イクニクル通フナリ。

いひ
○槭和名以比
○淮南子ニ云。決塘、發槭於今云伏樋ノ類ト聞ニ。記ニカケテヨメリ。

いひたらぬ
○イフニイハレヌ
○イハフヤウモナキ

いひあいす
○俗ニ同ジ

古 人やりのそきくあくに大うさいきくしとしのていざこうりあ世
後 池ゐれいひ出るこのかりんをみくりうれうりうり年で毒くくれ
拾 いけをそうこんのきりわそこひのロとうのまふたうべし
新後 そきくきづや山すとかけてせく池のいひ出ぐ紀こうろあうあ
古 あけぬくいひはのこうろつくうふちどいひそうぬ男ひそうん
子 をくくよくよいひくらぬつれんれ月もいすはの者のの花ら
源氏 風ケバあくの枝毛のそよくくといひあわせていづち散くむ
原李 都ゐもちりのあちひはかりくくどいひあをくくりくくの人のなきさ

○いもがり
女ノモトヘナリ

万 いもがりと馬にくらおきていこま山うちこえくればもみぢちりつゝ

拾 おもひかね妹がりゆけば冬の夜の川かぜさむみちどりなくなり

冠辞の部

いはゝしる
○瀧(タキ)ノサマヲイヒテ冠ラセシノミ。「タルミ」ハ垂水(タルミ)ニテ。此歌ハ地名ナラント略解ニ云ヘリ。

古 いはしる瀧なくもがなさくら花たをりてもこん見ぬ人のため

万 岩はしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりにけるかも

いそのかみ
○大和石上(イソノカミ)ニ布留(フル)ト云所アレバ。地名ヲモテ冠ラセシナリ。

古 いそのかみふるきみやこの時鳥こゑばかりこそむかしなりけれ

万 いそのかみふるとも雨にさはらめや妹にあはんといひてしものを

いなむしろ
カハツヒ柳 カハ
○稲蓆(イナムシロ)トイフヲ川ニ云カケタリト荷田翁ノ説。

風宗祀 いなむしろ川そひやなぎみづゆけバなびきおきふし下畧

万長 天星とたなばたづくゑて秋のやまし時ゆいなむしろかはむきたちて下畧

いなみ野の
イナ
○イナト云シノミノ料ニ冠ラセタリ

拾 ありぬべしわれやはさらにいなみのゝいなとはいはじをるをるあや

波の部

はにふ
○和名抄ニ。土ノ黄而細(ヲ)曰(フ)埴(ハニ)。和名波尓。萬葉ニ。黄土ヲ赤土トモニハニトヨメリ。冊撰ノ袖トモアリテ。古ヘ衣ヲ色ドリシナリ。フハ共アル所ヲ云。蓬生 浅茅生ノ生(フ)ニ同シ。

万 草まくら旅ゆく君としらませバ岸のはにふにゝほはせましを

黄夫 しらゝへちぐさよりの旅衣きしのはにふにいろふかひぬ

はとふく
○秋山鳩ヲトランドシテ。手ヲ合セテフクヲ云トゾ。

千 まぶしさし猟男の身ども多かりそ鳩ふきて秋のあらしに何あらむ

於玉 さゞれの降しむ夜もなりけれあてゝ秋の風なくねるも

そわけ

○葉ヲワケテ見ユルニモ。葉ノアハヒト云ホドノ意ニモ云ヘリ。

そか

○ハカハ限リシ。イヅコヲハカハイヅコヲ限リニテ。アトヽ云ホドノ意ナリ。墓ヲハカト云フモ此義ニ出ツ。

そかなし

○夢幻ノゴトクカリソメナルヲ云。死ヌルヲモハカナクナリニケリ。ナド云。又チヨツトノ間トイフホドノニモナリ。

蓁 ほのさし花をうつしもおもふ分の春をけさぞあらしちん

千 みてきてハ一あつさをおきそわけの春のこころせはやで

新続古 あひの作のさえぐれみどりあよ葉分の月もるるひぐぞあき

後 ふすぎバちるはすものを夏までもいづくをたちて尋ぐとはなし

源舟 かりそめこしき世の中をとゞめずハいづくをたかと尋きしみん

古 ぬぐちもえをのくやハ春とそんけうあき世をもうてとハこび

後 あぐ月の方のつきハいりちぐらけうあく秋ハすぎぬ夏ぐ秋

同 身をしらで人をうらむるそちゝひとりもけうふうけき

そかむ

○前ニ同ジ

新古 あみてさとそとえ新くいるうきとうかの春のわきれがさきや

同 ゆびぬたをきをのかり枕はうの雪やひとよだかりに

そがひ

○羽交ナリ。ハネヲウチヽガフヲ云。

万 芦べゆくかものちぐひよ雪ふりてこきゆくゆくハやまゝ

夫 あ暗のさがひの雪やおきぬるんをのくけくよりのきこゆ

ぞかり

○ノミニ通フ

古 ありけてぬ命まつほのうぐだかりうきことちぐくおるうぐだれ

千 我ものまとまくやかくまゝはだうをばこくして

新古 はつわくもんのあるのぐだういそぬぐくハとひそハきえ

ぞかり

○ホドニ通フ

河 名ことをばすて山もんしらどもちひだうの月ハあうき

ちた

○マタノ意トシ、ハマタ
ニマタト說クハチヨ
ツト聞ユル樣ナレド
サニアラズ、マタハユ
ルヤカニシテ、ハタハ
急ナリ、ハタシテノ意
ナリト加茂翁ノ言ハレタル、凡ソ當レリト覺ユ。

たれ
たたら

○マダラナリ、葉平朝臣
ノ歌ニ、鹿ノ子マダラ
トモヨメリ。

たつもり

○令法ノ名ナリ

○下賤、夏日葉ヲ摘ミ、貯ヘ置テ糧トス。餘國ハ知ラズ、佐渡ニ多クアリ。

たつう

○僅カナリ、スコシバカリニ同ジ。

たつる

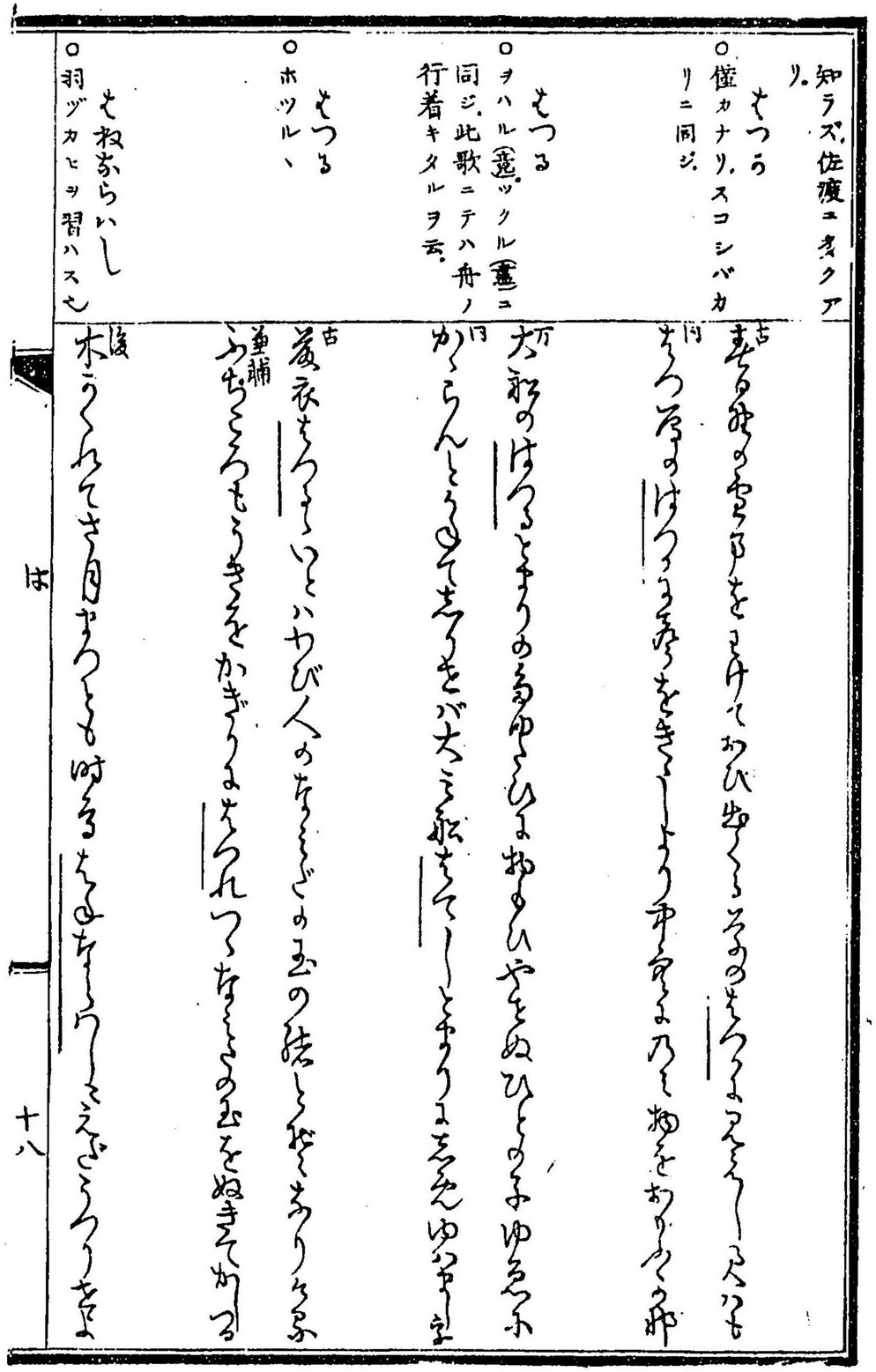
○ヲハル、竟ツクル、畫ニ同ジ。此歌ニテハ舟ノ行着キタルヲ云。

たつる

○ホツル、

たばからいし

○羽ヅカヒヲ習ハスモ



そねきる
○羽ヲ振フナリ

ちがやの芽
○ハナダイロハ縹色ナリ。月草ノ異名ヲ花田依ト云。月草ヲモテ染ヘいもとわれ花田の芽の中あれやそうつるかとこれを絶ぬる ル故ニ云ヘリ。其色ノウツロヒヤスキヨリ。中絶ユルヲニタトフ。

なびかしみ
○花ヲツミイル丶籠ナリ。カタミ古言カタマナリ。

むむけ
○葉向ケナリ。風ガ葉ヲムケルシ。

万葉巻十四
さ紀山のそこ紀の山の時そたきる初のゴ屋よ降おそる雪を拂とあ見

後拾
ちきあるんちあるこそ多くてぬれバたれぬ芽のこち狂れ

俊頼
石川のこまくゴに芽をとられて野花田の芽のちるむたくる

古
花ごろみ日ちゝぶ人のあやさなれバそ手ゝ丸ぬらん数ちゝぬきハ

新六
葉ちつむあ手をとめゝゴ花かゝみ ゝ初の陰のかゞやゝふゝん

新古
いつゝと萩のなふむけの初ゝとふそゝや杜ゝを風もきゝゆる

同
夕されバちをぎの葉むけをふく風ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

そく
○今庭ヲハクナド云ハ掃除スルナリ。万葉ニ掃モミジヤヌチモハカジト云歌アリ。

そぐゝむ
○羽合ノ義ナリ。鳥ノ卵ヲ抱キカヘシ育ツルヨリ云ヘリトゾ。

そや
○ハヤク

万
旅人のやどりきん四ゝ丸
同
大和ゝ時乃ゝ月のよほゝきをバたゝぐゝみ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

新古
ちつゝとそはぐゝみゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

万
わゝゴやどの芝ゝきゝよゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

新
かのゝゝよゝやゝゴをとゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

さや
○モハヤ

さや
さやも
○ドウゾハヤクト願フ意ナリ

さや
○歎息ノ意

さやく
○普通ノ早クナリ

拾
きのつるとしバくれ　ちもあかたちの山　さやさちよそり
風
わすれぬあさぢはかるゝ　袖さてさやさちの秋もきこゝろ

万
いざゝもさやさやまとく大伴のこゝろの浦まつ戸ちこひぬらん

後
大さやさちの山のこまつ原さやこゝろれ千代のかげこん

拾
冥ぐすむやどのこすゑのゆしくとかくてまでふかくうえしさや

性哲記
世年をさうをものとさきれのこもり山よちくらんさや

新古
石はしる初瀬の川の浪やさしはやさとしのこゝろ

千
てのゝ原すゝてくきはのゝこゝてさやくも月の面ゆくかゝ

さやく
○前カタヨリナリ

古
芳野うハいそ浦てゆくみのさやさで人をなひ初てし

同
よしの川よりや人社つゝめさやいひてしハやすれ

金
石さしる流のこゝれ上さやくようおるまきてこひわるし

新勅
山川のおとのきく百きを弟紙さやちぐこ戸ゝもれ

古
ちりひ川分をけやちぐこのの泡れきこてもをん波のまるゝれ

夫
さゝを川さやくのとこいちをよ月ちをよ月ちくちぐ殿

さやなぐら
○前カタ若キ時ノ身分デ

さやくのと
○前カタノ事

さやち
さやて
○暴風和名八夜知ニハ

波さゝむ沖のさやてやつるかゝ生田の磯よしるる支殿

カニ起ル風ナリ。今ハヤテト云ヘリ。

○

ともやふ浜　舟和名波良布末

後　大海よりぶをたゝびしきやあのはやくも人よあひそしぶ船

夫　大しるや沖よりいそぐちやあのちよ出びてこひわたるこれ

ともゆふ

○濱木綿ハ濱オモトト云モノナリトゾ。

万　くまもれ浦のたまゆふ人ちにこゝろはりへどたぶあぬも

拾　さしぶ人のくをとくまけてこゝの浦ゆふいくへたるこん

ともまをぎ

○濱辺ニオフル荻ナリ。伊勢ニテハ芦ヲ云トノ説イカヾアラン。

万　神風の伊勢のたまをぎをれとるをて旅ねやたゝんけゝき浦べと

夫　ゝたの浦よ一むゝたてるたゝ萩のちびくゝるをきをふすぶ

ともまひさぎ

○楸和名抄佐木濱ヒサ

万　波やたゝうをゆゝふ海の浦ひさぎひさしくなりぬ君を待べて

シトヨメルハ誤ナリ。野勢物

わづ浦ハ沖ゝ手線の浦ひさぎたづゝとゝふ人すれ

ともふらさじ

○ステモノニセマイ。

○モトハフルト云コトバニ出ツ。ハフルハ落ブルヽ。

古　名ハ出そゝらをどゝたゝきゝつひよバいつでなゝとちゝぶく

ともぶく

○羽ヲ振ルナリ。万葉ニ拂羽振トアリ。

古　さ月やま山ほゝきしちあぢき今もちゝ鳴んこゝのふる山ほ

ほ　いゝくも勢てゝゝり紅葉ちぶびゝちぬぐきあ戸の羽ぶも

月清　山川のつゝの底よ出むさゝのあのぶ羽ぶきよ出ふあゝし武

ともこやの山

○藐姑射山ナリ。莊子ニ出。古歌ニ多ク仙洞ヲサシテヨメリ。

千　百ふゝび浦ゝふハうゝ毋ゝこやの山いゝ紅いたるぶゝ

戒素　ちゝで行ゝゝせの秋も名ゝよゝこやの山れゝるゝのゝちバ

たてぐ
○トヾノツマリ

そゆる
○止ノ意ナリ

そゆ
○映マタ栄ヲヨム。○俗ニハエルト云。

そゆま
○ハヤウマヲ約メテ、ハユマト云。ハユマヂハ馬路ナリ。

拾 世中をかくいひくのたてぐハいとやつこちんとまむ

万長 ぢ 檜よあひをゝれる川原もぞうるわだはゆる 上下畧

於 あゆゝもいとゝよたゆんのれいのみてかハかりひさゆぐき

金 いりゝんタくれあぬのみたゝえて山ゝてゝんいたつゞゝれ

夫 男山かぎゝのもとまをゝれぞをゝのころりゝをゆゝちりきゆ

万 そゆまぢよりゝみゆゝしたゞのまふ妹ごゝろるのりふくゝれ

問 さゝつゝるがいつきゝとのよ程うけぬちゆまくゞれり中もとゞろ

○ハシハ端ノ。此歌ニテハ何トモツカズ用ヲ為サヌモノト云フ意。

そした
○前ニ同

むゝしり火
○真淵云。火ノ外ヘハネ古離トブヲ云ナリ。枕草子ニ。サワガシキモノ。ハシリ火トアリ。

そし舟
○游艇和名抄波之布称。小舟ヲ云。

そひり
○ハヒイリナリ。ヒイノ約ヒナリ。入口ヲ云。

古 本ゝもあゞびそゝもいつぬ作のまれたゝよ残身ハちゆぬ厚ゝ

後 身つゝき浅いくゞけゝゝゝあつぬゞゝ見くゞむのゝゞれけゝさる

人ゝあちんつきのあきゝハありひ出てむゞけゝ出ゝゝゝゝゝゝゝ

宣長云つきのあきゝぬハノぬハよノ誤ナルベシ

拾 むやひさゝかまのあちゝハの浪ゞ社あ月のたゝゝゝゆきもやゝれあ

万 たゝゝあゝれゆやゝゝと松島よりて久ゝきたり月のたゝゝ舟

後 妹ゝあのたゝひゝさゝてゝゝゝゝ称よいゝやれくゝん学ゝのゝ山ゝ

そひまつはる
○ハヒマトフナリ

そひえ
○延枝ナリ

ともり氏神
○契沖云、續昭曰、ハモリノ神トハ樹神ヲ云ヘリ、葉盛ノ神ノ義ニメ、御饌津ノ神ヲ申ニヤト、士清云ヘリ、

ともも
○歎息ノコトバナリ、君ハマア、霜ノフリヤウハマアト釋スベシ、

古 よそにあそかつん人と蓮の毛ひきつれてとゝぐハとゝも

歌 須戸のうしやあぶきてるてあまれたひえと活のうぬぶあき

柏木 かしハ本よ毛ちもあれ神、やきびとを人ちもくきやとのこもゝの

曰 ちくちくバあるしの枝よちくしん毛ちの神のゆくしいりきと

歌古 玉かしハ茂りうちれさくれつ毛ちの神のしんけあるまで

市 春ち神の毛ちやをわくてわひ出くる毛のちうよ天こ天八

曰 ちくくきの毛のやうくく時とわれとぬてのれたの毛のふりたち

ともす
○蓮ナリ、和名ハチス、ハハ其頃ノ俗語ナルベシ、

ともそそ氏
ハハノミコト
○母ト母ト語ノ通フ故カサネイフノミ

ともるのゆを
カヘスヽヽ
○田ガヘスヨカヘスニイヒカケタリ

ともるの日氏
ナガク
○春ハ日長キ故ニ長シト云詞ニ冠ラセタリ

冠辭の部

万長 ちくの実の父のこゝとちくてゆちのちくのみこと 上下畧

於 わすくくゝ叫くあくれぞまゆをうちくくぞ人いこちくき

古 をぞくてくとひいちあぞちのひれちくや人をつくくゝ見ん

食 ふけバリちのうまれちくをむこくてちぞくくちりぬりぞくくしのあう

枕 ちくれバちすのたちちゆちゆるのちくびこあくくわちちゆ氏

食枕 さくくちくてちくちのうきくちの春のちゆ毛ちくちでやる月新

そもさ名の　フルヒト

○雨ノ降ルニ、散人（フルヒト）ヲイヒカケタリ。

そつ屠の　ハツカ

○ハツカト云ン料ノミ

そふ蕎代　イヤ遠長ノ　タエズ

○クズカツラハ、長クタエズモノ故云ヘリ。

そふつぢの　ワカレシクレバ

○カタミ〳〵ヘ延ビワカルヽトフ人ニ別レユクニタトヘタリ。

○滝　和名ホハ太日美。

だかぐろふのそれつあ〳〵ぬつまるものふる人ちれぞそでぬれぬる

月　あうアのちつうよあをを知〳〵ちう市そ〳〵のゝおをおのつくれ

万長　そふ蕎のいやとい代ち〳〵万代よ多えでとろひて上下畧

月　ちゝふ蕎のあえでちのぞ重て上下畧

万長　つぬさちふいゝ此海の鮒をつゝのわれ〳〵それぞ下畧

仁の部

緯　さゝぶれのをやむ〳〵きの足てぬうれ和いづゝのゝ数ちう〳〵

○雨水ナリト見エタリ。ニハカイヅミノ意。

萩衣　いつまでとちゝぬあがめの庭てづゝかさあくでわれぞ々ぬぐ衣

野勅　多ちゝづゝゆ方ちゝぬあるひよちうのきけるきしめぐきれ

万　伺仮のうゝの庭てう行し荒荒のぞれ出る人面行るのつう舟

○海上ノ平ラカナルヲ云

男勅　ちてくる泊井の月もかげちて庭大うろうやるあおのそで

夫　吹ちる庭天のまくの宿の秋をころうすゝてや弥もきくん

○庭燎　和名速波比神楽ノトキタクナリ。

袖中　あてとのあぐちよすう海の菜のうきみちづゝ物を社男へ

男ふ　ちうあ〳〵やれよぐどよ海のよるあほの宿菜のさそも世ちる

○鳥ハ波ノウヘニ巣ヲツクル故ニ云。漢名鷺鶿ナリ。

丹ふふ
○荷又擔ヨヨム、俗ニ同ジ、

みぐる
○逃ルナリ

丹げみ
○武藏野ニアリト云、水夫アリト見テ其所ヘユケバ在所ヲ失フ、故ニシカ云ヨシ、

丹ごりて
○江ノ水ノ濁リタルヲ云、名所ニアラズ、

みしき木
○錦木ハ、陸奥ノ俗ニ、女ヲ恋フトテ門戸ニ立テルアリ、千束ヲ限リトス、遂ントト思フハ取イレ、遂ハジト思フハトリイレザル故ナルヨシタ云ヘリト、奥儀抄等ニ見エタリ、

にじ
○虹ナリ 和名尔之
○兼名苑ニ云、虹一名蜺、

丹ちつ雪
○カケ
○カケ雞ハ人ノ家庭ニスムモノニエ冠ラセタリ

丹ちどり代
オキ長川 カッシカ
○息ノ長キ鳥故オキ長川トイヒ、カジクト云ヲ省キテ、葛飾ト云カケタリ、

ち
○アラハニ」ト云フ意

冠辭の部

保の部

○草木トモサキヘアラハレ出ルヲホト云

おろし

○ホロヽハ雉ノ鳴ク声ニ。ホロヽウツハ羽タヽキヲスルヽ。

おかして

○厚朴和名抄之波乃木。俗ニホヽノ木ト云

おどかし

○怯ニ同ジ

人目すゝ我うはあやれむすきちどうゝをて立ずもあん

古まつ野のをぐきとうふのつゆ立ちとびとうきゝのこゝろとそふ

大かりの世とうふべし主殿の名とうきゝんほうゝとをちく

日きゝんちくあしゝのうをとゆけばさわゝぶあさうれとうこ

万ゆけてあぐさげてもそるちかゝはあゝかゝ仏ゝうきゝぬかさ

後いとせめて立ゝき旅のかゝ衣ちどうゝうん人もあゝふ春

山ふのことうへばそきまるゆちどうゝくうこちゝきまれ

おどかし

○何程モナシナリ

おてく

○コワイ

○スンデノコトオソロシキナリ。此歌ニテハ木ヲ伐ル音ニカケテ云。

おる

○ホルハ欲スルナリ。ホルヽヽハホシイヽヽトナリ。ホリシハ欲セシナリ。

おづうゝ

○朗ヨホガラトヨム。ホンノリト明ル景色ヲ云。

おざし

○覊絆ナリ。アシテマトヒト云意

あもはゝ山もるどをゝゆゝ立をふとうへてうとうゝ

日曳てうるうのわハ汗どちきとはうでうるうゝ代うゝ有ん

古家つゝ立強のうゝみのうをのあてうてゝかゝる目をうゝれ

万まゝ飛よるうゝうれどをゝうゝ立せうゝうせきゝ人のうゝ立ふ

万ゆうゝ山まハうきうゝ唐きはうゝみのゝれもそひうゝね

古ちゝ立のうゝゝとゆけハあのゝきぬゝちうゝかゝ外ゝき

古あうゝねゝふゝゝ社ゝゝて世中をあうゝひうをうれぬゝゆゝちうゝ

ほれ

○耄ヲ老ボレト云。ホレトハ。我ニモアラズボンヤリ（恍惚）トスルコトナリ。恋ニホルヽト云フモ。氣ヲ奪ハレ心ガ彷彿トスル所ヨリ云ヘリ。

古 世のうきめみえぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ

後 山風の花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

恋歌 [illegible]あしからばあしからの木ゝまがくれあてなれくるおもふ[illegible]ほれしかのこ

ほむら

○火叢ヲヨム。ホノホ（炎）。焔ニ同シ。

夫 [illegible]をあまたまよ風の吹きりておもひむらよほむらぞ[illegible]

日 あづまてゆきくだりきほむらしみ[illegible]ひのむらいさよ

ほむき
ほむけ

○穂ノナビキテ向フヲ云

万 秋田のほむきのかたよりにきみによりなゝこちたかりとも

散木 うらかれ芦のほむけの風のかはるよりに秋ぞしらるゝ浦路

ほの

○チラト
○ホンノリ
○チヨツト

後 ほのかにも見えずなりにしと思ふにもこゝら社しのぶほのかれ

拾愚草 なかなかにきえぞこのほのかにぞ[illegible]のかげ[illegible]やどのうきよに

ほれぼれ

○ボンヤリ（彷彿）ナリ。ホウボノメカセ。ハボンヤリトミセヨノ意

後拾 かくれんとあまのいさり火ほのめきて磯べのなみのをりもよかりけり

ほのぐ

○カスカニ。ウツスリト。ナドサダカナラヌヲ云。

名歌 よりて社それとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔

月清 しほがまの浦のさゝなみ[illegible]ほのぼのとすゞむおきのあさがほ

ほこる

○誇ヲヨム

東歌 あさのまはよそのをかた人[illegible]浦風[illegible]

ほしとなふ

○元旦四方拝ノトキ

年中行事 すべらぎの星をとなふるそのよはに[illegible]

天皇星ノ名ヲトナヘ玉フヲ云。

へ

○へ(舳)今モ舟ノ「ヘサキ」ト云ヘリ。

あらうあの屋くりつる細の目ハつきんの数こそ有ケ原

清いづるとまりのうみのいそうあぐるあさこゆちう

屋た

○海濱ヲ云。今モウミベ「タト云ナリ。

あつまけく屋くハ人しる沖ゆ波天をおきてハしるひさし

後

行きんよ「つの屋くめをありひんあきつまをかづく見て

べらおり

○デアリサウダヤ」ト。伊庭秀賢譯ス。はゆび抄ニ。デアリサウニ思ハル」ト譯シタルハアタラズ。

山峯うきかぶてぐの山こいづる月くもはまてしん屋ちう

あそ出る月もあるれ見りの山のたちもとむべちう

邊の部

ぺく

○「ベクハツバク詞云々スルヤウニ」ト訳ス

夕ぐれのそらぐ紀ハ山と尽くれんよるハたえてじとやどりとぐ

山ゐきくさくゆやまき孔きちんむの月ぎめくうちちまも屋く

山しおのおとつのやりかおくるごと人のちくべく我こひそやも

屋て

○ホド経テノ意ナリ。「ヘ」ハ糸ノ縁ニヨリテ云ナリ。

屋ミ

○サウノ故ニト譯ス。チリヌベミハ、チリサウナユエニ」ト心得ベシ。

ゆくぐくるやどふこをぬ紙の糸ハ屋て尽ケ年きぬるで有る

さぼ山のそくこそのあ玉ちりぬべくとくくこて尽ケ月ぞ

長

名る、いでバ人まりぬべく墓屋のゆつぐこなあでひとあて上下君

止の部

と

○外ヲトト云ヒ、内外ヲ

山里すあのハ市あくこそてどうきの柿ちゐハ山くこ千こ伸

ウチトト云。

とはに
○常ニナリ

今 山さとのとみのを田の苗代はいまもかのすのもくぬはぞなき

新千 神路山うちとの宮の夕かつらいく代をかけておもひこぶれん

古 ほのぐふみはるすべ山しろのとはにあひみんことをのみこそ

伊物 風ふけばとはに浪こす岩なれやわが衣手のかわくときなき

とばかり
○チトノマ
○文ニハ多カレド歌ニハマレナリ。

後拾 たえずしてあけぼのやはらん枕の[illegible]のとばかりぞきく

とばかり
○云ヤトバカリヲト云フコトバヲ切リタルノミ。前ノ意ト混ズベカラズ。

後拾 今はたゞおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

壬二 いつまでか衣の裾はぬれそめし「とばかりききとふ人もがな

とはずがたり
○問ハレモセヌニ言出ルナリ

千 つゝめどもたえぬおもひはちりぬればとはずがたりにもらしつるかな

新古 そろともあはれといふをばいとはぬ人まねぬとはずがたりのよしもがな

とばり
○幌 和名止波利。
○唐韻云幌帷幔也

夫 ひくれあふ帷のとばりひきくて[illegible]のとばりや八月もとかくしび

後京 やいばにはとばりちゆうをもだれうちを大みなかを舞まきん云云

とにかくは
○ドウセウトカウセウ

玉 とにかくみ心ひとつをはらしきていつをおもひのよそとうらみん

とにもかくにも
○ドウデモカウデモ

古 かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな

とを山ずり
○遠山ノ形ヲ摺リシナリ

後 あやしとはとを山ずりのかりごろもきてはつひなき袖とのぞかぬ

続古 秋ふかきおこそやかさぬらんきとを山ずりのこゝろもかりがね

とかをて

○樞 俗和名度保萬良 孫炎曰門戸之樞也トイヘリ。中世タヾ戸トイフコトニコメリ。

若菜 春山の松のとぼそをやすらひてまだ見ぬ花をたづねつるかな

十 あをやぎのいとのうちなびくはるかぜにみだれそめぬる春のあけぼの

新古 うれやなほのこりなき世のおもひでまちつる花のたけのうぐひす

とゝのふ

○十分ノ意

金 おもひくはへてのくてゆけばやがてまさごのうへにあれこそはれ

とゞろ

○ナリヒヾク形容ニ云

古 さゝがにのくもとゞろふなるなるとしるあきのたなびくをみん

金 白やまとよとゝろふるなるかはのゆもとゞろよもすがらきこゆ

とゞろかす

○ナリヒヾカスナリ

古 天のさかとゞろかすなりもりの中をぞさかるものうる

とゞこをる

○滯ナリ。歌ニハ氷ニカケテヨメル多シ。

金 分のゝさをもとゞこをりぬはちすゞのあるもとゞこをりぬ

歌 あしのしたゆゝあるのみちもとゞこをりてこるあるれ

とぢ

○ヲハリ

○シマヒ

未 摘 かはつきてとぢめんてはきすぎてこゝへまきつきぞかつはあやなき

外二 ゐづ川のきしに白くるかぎきくちとぢめたりけるもの

とぢ

○タノミ

○トリエ

後拾 ほとゝぎすあふきをきくのこゝぞおもふひとのとぢ所なる

羽 八重むぐらとぢるやどはよもすがらこゝのとぢ所なる

とりかへす

○俗ニ同シ

六 とりかへすものもなりやとゝをれあてくゆきのををりつく

金 池のとゝろむやづなを城のとゝろへびすのもかもやへをとみど

とりあへず
○イウヨセヌ
○スグサマ

とりもあへず
○前ニ同ジ

とり志で、
○坐シカヘルナリ。古事記ニ坐ヲ訓テ志殿ト云。宜長云ミダハ志陀礼ノ約ナリ。

とせ
○タワヽニ同ジ。タワヽナリ。

第十六 つれなきをとこのみもたてぬものゆゑとりあへぬまでおどろきぬ

第十七 まつちやまをうぢてもとりあへぬものはきぬぎぬ

古 けうさまふ年もゆうゐんとりもあへずすぎるよりひやうまうぐさと

第十八 はしのもとの神のたぐ代りの神の古宮をいまひそめむ

第十九 ちはやぶるかみのゆたちのきぬをとりあへずいかですつる万代までに

第廿 ちはやのやまぢもあまのかれぐもの神のたもとをとりあへずとて

古 をとをとこをふるまひ秋霧のうへでもとをとをふるまひ

とわたる
○裏覓ニ疾渡ルノ意ナリトアレド受ガタシ。ト俗ハ發語トルベシ。

とかへる
○頭昭ノ説ニハ毛ノカハルヲ云トアレド、イカヾ。或説ニ鷺ハ必巣立セシ山ニ冬歸ルト云ヘリ。トカヘハ是ヲ云フ歟。猶考フベシ。

とかへりの花
○松ハ百年ニ一度花サクヨシ。ソレヲトカヘリノ花ト云トゾ。

とよみ
とよむす
○ナリヒビク
○ナキサワグ

第廿一 わがくるは雲ぞおくれてのぼるかのこゆのしづくに

俗 はるばるとたちくるかぜのたてとなりてのけしとなりてのぼるかぜ

第廿二 ゆきのとかくる山のさひ栄の葉をうへはもきみはかぐさし

第廿三 ちはやぶるかみのうの山をやまづたんとうつる山をあらしふるさん

第廿四 ちはやのむのゆうやむしてきの原よいつてをかつの後あ

新後拾 とうくりのあをつりをうえまをうつ代のさ

第廿五 ふるの山のやまもとをみひのうをしたなる手ゐ海もうぶつ

第廿六 かもとの山こだちをたづね行きこぎてきあ紅とどのの寺の

とよさう代ぢる
○豊栄昇ル」ナリ

とよのあそび
○豊明ハ禁中ノ宴會ナリ。イニシヘ豊明節會ハ十一月ノ中ノ辰ノ日ニ行ハル。

とよとし
○豊年ヲ云

とづく
○俗ニトヅクト云

古 秋ふかくなりぬれば山のやまもとにみ雁のなくこゑ

金 ゆくとしをうけとるまでとおもふ

万 ゆくとしをうけとるまでとおもふ

万 きとしのもとめとしの年をまちしる

きそ そのはしやふきをこしてかけ橋もたれかをるまうはわれいかにせ

ドウナリトカウナリ
○ドウナリトカウナリ

とのもり
○主殿寮ナリ。リヲ省キテトノモトモヨブ。職員令ニ掃部殿庭トアリ。伴氏ノ御奴ハ掃除スル下部ノ役者ナリ。

とく
○疾ナリ。ハヤクニ同

とぐら
○塒和名抄ニ鳥ノヤドリ所ナリ。

とやかへる
○鳥屋ニテ毛ノカハル

拾 あしのもりけるものやづからあしばしをとりあらためられ

拾 ものもとくとくとおもふ

万 とぐらにてかひしうのおすぐちれバはゆるのをとふとびうつる

拾 やうえのかくるをとづるてすてらるべき宮のひもあり

後拾 とやかへる古ふの庵のこゆをのこ古ん世をまあるるうれ

ヲ云トゾ

とやま

○奥山ニ對シテ、外山トイフナリ。

とぶらふ

○訪ナリ。トブラハンハトハント云ニ同

ところせき

○所狹キナリ。トコロセキ人ナド云フハ、世ヲ憚リヲカクル、人ヲ云

とこと七

○常磐(トコトハ)ナリ。トキハトコシナヘ、昔オナジ意。

ときのま

○チツトノマ

ときじく

ときじく

○時ナラザル人、日本紀万葉共ニ非時ト書ケリ。図迅

とき風

○トキドキ颯ト吹ク風ヲ云ナラン。海辺ニ多クヨメリ。異解ニハ潮ノサシクル時ノ風ナリト云ヘリ。

ときわかきも
○常磐堅磐ナリ。イツモ変ラズ動カヌノ意。

と名
○ミトメ(認)ナリ。スモトメ(密)ノ上畧トモナレリ。

とし代
○毎年ナリ

とのを
○年ハ限リナク長キモノナレバ。緒ノ長キニタトヘタリ。年尾ノ意

万 代をまつのを山のうげちぢに君をぞ思ふこと紀ハかきをそ

古 ちとせのみのやまくとえくわを山こハたてもなくちとこなす

拾 めるぐあるうとおるくバ柳葉の者をちつ〜ことめて従され

拾古 ちとせ〜梅きうれるわやどをこと拾ひとうを拾たん

万 年のをふまちのきくバかく〜社こ先さかぐ〜てたぬくの夢め

拾古 ノ宮柳しをきまちの数をくていやこ〜のをこ夏をみのこむ

万 花玉のこ〜のををくるまでろわぐこひをこんいかちもて必そ

古 栩樣ろかくるいこのこちをくて年のををくこひやこ〜ん

ニヨメルハ非ナリ。

ともかくも
○ドウセウカウセウ
ドウデモカウデモ

ともし
○之ヲヨヘ。少キニ同シ。

ともし
○ウラヤマシト云意。ヨロシキコニモイヘリ。日中世ブリニハイカヾ。

ともずり
○タガヒニスレアフヲ云

後 ともこうもいつことのをけるん人めれいづ〜ハ春のかるをどころハ

万 くるをの山をこ〜ろ拾ごろに出くる月のひるをみすき

月集 山ふるきこのこ〜わこ〜ゆこ〜こ紀川の春のとのき

拾 あをまぐこ〜紀人ともすちもひゆきこ〜ん人きひとゆすき

夫 風ふけバ竹のを本のともだろこふやヨづ〜ハよろのこ〜ひを

拾古 ふきこ〜ろ玉風ハきこるを菊こ〜やをのこ〜ものかこのこ〜を

ともすれば
○ヤヽトモスレバ
○ヤヽモスレバ

ともづな
○纜和名抄ニ船ヲツナグ縄ナリ。

とすれば
○ドウスレバ云々トイフ意

冠辞の部

とまをなく
○鶏ハ夜明ニナクユヘ。明トイヒカケタルナリ。阿豆萩ハ。阿我豆萩ノ我ヲ省キテイフナリ。

とぶとりの
アスカ
○ノスカト云鳥ノ名ヲ。明日香ノ地ニイヒカケ。トブ鳥ト置シナルベシト云ヘリ。

ときつ風
フケヒノ浦
○時津風ノ吹クト云カケタリ。天津風フケヒノ浦。沖津風吹飯浦ナドヨメル皆同シ。